

「これは京舞井上流の家元だった井上八千代さん(四世)の銀髪をイメージした作品なんです。これは歌手の香西かおりさんが日本レコード大賞を受賞した時のものです」。手掛けた作品の数々を実物や写真で示しながら、時には紙に書きながら、素人の当方にきものの初歩から教えてくれた。きものづくりに寄せる情熱に終始圧倒されてしまった。

できたら

100歳まで…

寺田染工代表 (京都市)

てらだ かつのり
寺田 克則さん (76)



友禅染などきものづくりは完全分業制だ。多くの職人さんの手をへてできあがる総合芸術といわれる。「私の家業も分業工程の一つである引染を生業としています。でも、どうしてもすべての工程を指揮するディレクターとして、きものづくりをやりたくって、40歳ごろから特に女性のきもの制作を本格的に始めたんです」と教えてくれた。

「眼で愛(め)でて 着て愛でて」。そんなきものをつくるのが夢だという。「でもね、きものというのは、

きものが

主演と違うんです。最終的に主演は人なんです」と話す。「幸い私の自宅が茶道・裏千家の近くなので、四季折々にきもの姿の女性が見られますので観賞させてもらっています。もちろん、きものをつくるこちら側の人間も時代を敏感に取り込むみずみずしい感性が問われます」。その厳しい言葉に覚悟を感じた。

今年の6月まで16年間、京都芸術家国保組合の副理事長を務めた。健康法は歩くこと。53歳の時、心筋梗塞に襲われ一時生死をさまよった。「それまでたばこを1日80本ほどすっていたんです。今は、路地に咲く花を愛でながら日曜日なんかには最低2時間は歩くことにしています」。趣味は読書。「なんでも見たい。知りたいんです。だからジャンルは問いません」。取材中、寺田さんの口から万葉集や百人一首の歌がポンポンと飛び出した。

「つい最近、得意先の方が『80までは頑張ってくださいよ』と言うので『できたら100歳まで…』と冗談で言うたんですわ」と大きな声で笑った。帰り際、「夢は持ったほうがいいですよ」と逆に励まされてしまった。

